（社）日本ライフストーリー研究所　　2022/04/15　第 28 号

JLSR ニュースレター

祖父の友人の足跡を尋ねて

筒井　久美子

わたくしごとではあるが、2018 年 11 月、祖父が亡くなった。最後は病院のベッドで寝たきりであった彼の枕元の棚には、いつからかクリアファイルがおかれ、中には飛行服姿の男性の古い写真が印刷された紙が収められているのが見えた。気になった筆者は祖父にこの写真について尋ねてみたこともあったが、祖父は耳が遠いためか、認知症を患っていたためか、曖昧な反応しか得られなかった。生前は勝手に触ることがはばかられたそのファイルを、祖父が亡くなったのち、初めて手に取った。

男性は「犬飼成二」という名前であった。年齢は「18 歳」。「甲飛 13 期」で「名古屋海軍航空隊附」、「第3草薙隊」として「九九艦爆」で「第二国分」から出撃し、「20.04.28」に「沖縄周辺」で「戦死」した。犬飼さんは神風特別攻撃隊の一員として出撃して亡くなった方であった。

ファイルには他にも資料が保管してあった。資料に目を通すと、犬飼さんは祖父と小・中学校の同級生で、祖父が戦後数十年たって鹿屋航空基地史料館を訪れたさい、偶然、犬飼さんが神風特別攻撃隊の一員として戦死していたことを知ったことが分かった。このほか、犬飼さんの入隊後の足跡を尋ねた手紙や、沖縄にある慰霊碑の犬飼さんの名前が刻まれた場所を示す資料もあった。数年前、祖父が突然、パソコンを使いたいと言い出したことがあったが、犬飼さんのことを調べたかったのではないか、という考えが頭をよぎった。

手にした資料に書かれた単語の意味がほとんど分からなかった筆者は、インターネットを使って検索を始めた。しばらくして「犬飼成二」さんの名前を検索すると、彼が旧制中学時代につけていた日記が掲載された本があることが分かった。1943 年 7 月、犬飼さんが在学していた愛知第一中学校で起こった「愛知一中予科練総決起事件」と呼ばれる「事件」を調査して書かれた本であった。

早速、その本、『積乱雲の彼方に――愛知一中予科練総決起事件の記録』（江藤千秋、1981、法政大学出版局）を入手し、眼を通した。1943年、当時の日本海軍は航空兵力増強のため、甲種飛行予科練習生を大量募集、旧制中学校ごとに志願者数を割り当てて志願者確保に奔走した地域もあった。愛知第一中学校もまた割り当てられた志願者数を確保するため、3 年生以上の生徒を集めて時局講演会を実施、これに刺激を受けた生徒が全員志願（総決起）を決める。東海の名門と言われていた同校の総決起は新聞で大きく取り上げられ、触発されて総決起を決めた中学校もあった。この本の筆者の江藤さんも犬飼さんも祖父も「愛知一中予科練総決起事件」当時の同校の生徒であり、予科練を志願していた。

生前、祖父が海軍にいたという話は耳にしたことはあったが、犬飼さんのことも「総決起」や「予科練」のことも全く聞いたことがなかった。それだけに、亡くなるまで犬飼さんの写真を枕元において持ち続けていたことに衝撃を受けた。祖父にそこまでさせたのは何だったのだろうか。筆者は犬飼さんのことを調べ始めた。

犬飼さんは 1943 年 10 月、旧制中学 4 年の頃に第 13 期甲種飛行予科練習生として松山海軍航空隊(松山空と略称される)に入隊、松山空宇和島分遣隊、上海空、青島空を経て 1945 年 3 月に名古屋空に配属、4 月 12 日に草薙隊として鹿児島県にあった前線基地・第一国分基地へ移動、さらに現在は鹿児島空港となっている第二国分基地へ移動したのち、4 月 28 日に出撃、同日に戦死した。

前線に移動してから出撃まで 16 日。犬飼さんがこの 16 日間をどのように過ごしていたのかを知る手がかりを探すため、2019 年 5 月、11 月に勇気を出して鹿児島に足を運んだ。11 月の旅で印象に残ったことを 1 つだけご紹介したい。国分第一・第二基地で待機していた隊員たちがはるばる通っていた温泉地がある。犬飼さんが出撃する直前の 4 月 25 日と 27 日夜、犬飼さんと同期で松山空から出撃までずっと同じ航空隊で過ごした井上信高さんら数名が、この温泉地にあった鶴丸りつさんの家を訪れていて、彼女がそのときの様子を井上さんの父宛に書き送った手紙が残っている(岩元喜吉、向井田孜編、1992、『鎮魂　白雲にのりて　君還りませ　特攻基地第二国分の記』十三塚特攻碑保存委員会)。手紙には犬飼さんのお名前は出てこないのだが、同行している可能性があるのではないかと考え、りつさんを探していた。

ご本人にお会いすることは出来なかったが、鹿児島空港の近くにある溝辺コミュニティセンターでりつさんを知る方からお話を聞くことができた。溝辺コミュニティセンターは、空港を見下ろす高台の上床公園内にあり、園内にある特攻隊員の像や出撃した方のお名前が彫り付けられた石碑の前で、毎年 4 月に慰霊祭が行われている。りつさんも 2002～3 年頃まで 4 月になると慰霊のためこの公園を訪れていたという。しかし、訪れる日は慰霊祭の日ではなく毎年 4 月 28 日だった。犬飼さんらが出撃して亡くなった日である。りつさんが最後にいらしたとき、彼女は 90 歳くらいになっており、サポートの方に支えられていたそうだ。最後までしっかり見送りをしたいとおっしゃっていたという。

旅の終わりに筆者は鹿児島空港の展望台に上がった。そこからは滑走路を見下ろすことができる。犬飼さんが出撃した第二国分基地の滑走路は現在の鹿児島空港の滑走路とは少しずれた位置にあったのだが、その滑走路があったと思われる場所まで見渡すことができる。犬飼さんの 16 日間について知りえたことは多くはなかった。しかし、亡くなってから数十年経過した人のことを心にとめている人がいることを、改めて感じることになった旅であった。そして、筆者もまたその一員となっていることに気がついた。

(つつい・くみこ　早稲田大学)

第 13 回ライフストーリー調査研究講習会の報告

2022 年 3 月 27 日(日)に第 13 回ライフストーリー調査研究講習会を開催しました。参加者は、オンライン(ZOOM)が 15 名、リアル参加者が 3 名でした。

当日のプログラムは、「ライフストーリーの分析／解釈に向けて(応用編)」でした。

以下に、参加者の感想(抜粋)を掲載します。

・これまでの優れた LS 研究の詳細な分析視点や方法をできればその当人から苦労話も含めてお伺いすることで、分析で悩んでいる人々にヒントを与えることができるのではないかと思いました。

・昨年データ分析についてのお話していただきましたが、その時には、データが手元になく、ただただ一生懸命理解をしていたという感じだったのですが、実際に、少しデータをとってみると、具体性が出てきて、お話を聞いていて理解がより深まるという感覚がありました。

・ブレイクアウトルームがあると他の方が分析の際どのようなことに着目しながら考えておられるのか勉強になりました。
・ライフヒストリーとライフストーリーは必ずしも二律背反的な関係ではなく、ライフヒストリーの視点を持ってデータを見つつ、ライフストーリーの視点で分析をして行ければ…と感じました。
・インタビュアーの発話がない TS とある TS を読んだことで、ストーリーが相互構築されていることが実感としてよくわかりました。
・今回は初めての参加だったので、全てが新鮮に感じられました。またいつか別の内容で（受講済みの人向けに）講習会やワークショップ等がございましたら、次もぜひ参加してみたいと思います。

会員エッセイ

立山さんと私

高田　賀子

立山尚（たてやま　ひさし）さんと出会ったのは、2002年夏の通信制精神保健福祉士短期養成施設である A 福祉専門学校でのグループ演習の場であった。「私は精神障害者です！」と自己紹介で立山さんは力強くおっしゃった。私はびっくりして、昼休み「実は私は精神分裂病なんです。」とこっそり立山さんにいうと、「ピアだ！」と喜んでくださった。その後、幸運にもお互い精神保健福祉士を取得した。対人関係場面や就労において、ずっと内なる偏見のためクローズ（病名・障害非開示）できた私に対して、立山さんはオープン（病名・障害の開示）を貫かれた。精神障害を生きるゆえに様々なたくさんの差別を受けてきたにもかかわらずである。そして、自らの体験から「ひとりぼっちの精神障害者をなくせ！」を理念とし、武蔵野市を中心とした精神障害者のセルフヘルプグループである「翼の会」をつくられ「メンタルヘルス・ティータイム」の会などされてきた。

私は進路に迷うことがあると相談の電話をした。いつも穏やかにご対応くださった。私が公益財団法人井之頭病院のフルタイムパート精神保健福祉士に内定したときは、お祝いの電報を送ってくださった。あのめでたい（鯛）の絵は忘れられない。それから4年9か月間勤務したが、クローズであった私の姿勢を尊重してくださった。今思うと、ご自身はオープンであったが、一度も私にオープンを強いることはなかった。立山さんは2022年2月26日に心不全のためご召天された。63歳のご生涯であった。前日の夜オンライン「メンタルヘルス・ティータイム」で、ご自身の自叙伝を読み終えた直後であった。2003年日本社会事業大学大学院で社会福祉学修士をおとりになられた立山さんを心の中で仰ぎ見ながら、修士論文執筆に奮闘している。尊敬する大先輩に捧げます。

文献：立山尚（2008年 5 月）精神障害を生きる『障害学研究3』抜粋　明石書店刊

海外に出たい

中原　逸郎

中華民国嘉義市の旧日本茶屋調査（中原、2015）に関連し、旧日本海軍の保養施設であったという元茶屋 A を探して 2017 年台南市を訪問した。A は戦後経営者が現地人に変わり旧態を止めない。しかし、経営者が飛虎大将軍（旧日本海軍の飛行士で、地元で戦死し祀られている）廟の保存会員であることも、A との因縁を感じさせる。

この旧新町地区（現大智路）ではこの辺りが花街（フォアチエ）であったと若い女性から聞き、「花街」という言葉が中国社会で活きていることを知った。台南市当局は旧花街の保存をめざし、最後に残った元茶屋の確保に力を尽くしたが、この「真花楼」は売却され、雑居ビルとなった。

高雄でも旧交番等日本旧跡を再建・補修保存しようとする動きがある。2019 年暮、高雄に帰省中の Y さん、恋人の U さんとともに資料探しに図書館を尋ね、2 人の通訳で郷土研究家から偶然現地の芸者（芸旦）の画像等を入手でき、発表で使った。Y さんとは、中央研究院（台北市）の発表時（2016　国際伝統音楽学会 ICTM）以来の知人である。

また、祇園甲部花街（京都市東山区）の外国人殺到と舞妓等に対する狼藉に対し、花街に関する理解

を求めて発表を行った（2017 アイルランド リームリック、ICTM）、（2018 メルボルン、文化経済学会 ACEI）、（2019 ホーチミン、ACEI）。このうち、アイルランドでは無声映画「祇園小唄」（1930）の映像を見せ、同主題歌のレコードをかけたところ、外国人が大勢を占める会場で祇園小唄の一節「祇園恋しや、だらりの帯よ」の日本語の大合唱が起こり驚いた。ホーチミン行きの際は機内誌にハノイ市のカム・ティエン花街の復活記事を目にし、うれしく思った。

高雄から帰るとコロナの感染拡大で海外には行けなくなった。ズーム会議が主流となり、筆者も東京に居ながら国際間の研究発表（2021 福州教育大学）に参加し便利さを実感した。それでも対面の研究発表（2018 福州大学）の熱気が忘れられない。海外に出たい。

「1 行でも OK」

林 哲也

「課題を提出したから学んでいる、ということではないと思うんですよね～」。コロナ禍直後、大学生4名とZoom で近況交換をした時に 1 人の学生がそう言った。彼らは不登校、高校中退の経験者で元々ステイホームのベテラン。急激な社会の変化にも落ち着いたものだった。片や教員は急激なオンライン化で大慌て。不慣れなツールにあたふたしつつ、「ちゃんと勉強やってるか～？」と一生懸命課題を出す。学生たちは「先生も大変ですよね・・」と労いつつ、その課題の総量たるや膨大となり、いわゆる「課題地獄」の渦中にあった。

「僕たちは学んでしまっていると思うんですよね。先生たちから見て、やる気のないように見える学生の中にも、学んでしまっている人は結構多いと思う。本人も自覚していなんだけど、こういうコロナの状況で少なからず何かを考えるわけで・・」、「昔は私たちもやる気がないように見られてた（笑）」、「あの頃（不登校の頃）って学校に行くっていう常識がなくなって、めちゃくちゃもやもやしていて、だけどサポートしてくれた予備校では、あれやれこれやれとか、レポート出されて変わっていったわけではなくて、きっかけをくれてただけだと思うんですよね。学びって細かい内容よりきっかけが大事だと思う」。

学びはきっかけが大事。改めてなるほどなあと思う。その後、私もオンデマンド講義を担当することとなった。健康や心理分野を扱う一般教養でもあり、各回のリアクションレポートは「字数は自由・1 行でも OK」とした。よくよく考えてみると「字数は学びを担保するか？」という問いも立てられるし、学生が無理やり字数を埋め、教員が同じような内容を繰り返し読まされるという不毛なサイクルもある。レポートにはできないけど何となく気づかされた、そんな非言語の感覚知も立派な学び。だから「教員として安心する文字数」は無視。ひたすら精魂込めて授業動画作成に励んだ（つもり）。結果、むしろ大変な文字数のレポートが毎回返ってきて（しまい・・）、中には1万字超えのものもあって嬉しい（？）悲鳴。等身大の飾らぬ言葉でつづられたレポートは、どれも読み応えがあった。

「1 行でも OK。いいですね。でもその意味を相当丁寧に説明した方がいいと思いますよ。1行でもよいと油断させて、実はたっぷり書けという意味かも？って学生は警戒しますから（笑）」。先の学生たちから、そんな貴重なアドバイスももらいつつ始めた「1行でも OK」。単なる「楽単」講義と思われても癪なので（笑）、試行錯誤しながら実践中である。

LS 研　4 月例会のお知らせ

日時：2022 年 4 月 23 日（土）13:30～16:30

場所：日本ライフストーリー研究所リアル参加（5 名ぐらい）およびオンライン参加

報告者：小手川良江さん
（日本赤十字九州国際看護大学）

報告タイトル：中堅看護師のレジリエンス：複線径路・等至性モデル（TEM）を用いたプロセスの分析（仮題）

概要：TEM の理論や方法をもとにライフストーリー法と TEM を用い、1 人の TEM 図の分析例をもとに説明する。

申込:以下の URL よりお申し込みください。

http://lifestory.or.jp/meeting_form/

★報告者は随時、募集中です。メールにてお問い合わせください。語りの地平 Vol.7 に投稿希望の方は、ぜひとも、報告をお願いいたします。

『語りの地平』Vol.6 の合評会を開催しました

日時:2022 年 2 月 27 日(日) 12:30～17:30
形態:日本ライフストーリー研究所リアル参加およびオンライン参加
参加者は 27 人でした。報告者は以下の通り。

◇佐藤正則・三代純平:戦後サハリンを家族と共に生きたある帰国日本人女性の語り
◇金志唯(神谷志織):外国出身の親をもつ子どものライフストーリー
◇藤崎宏子:中年期女性の世代間関係と介護
◇齋藤公子:「病いの語り」をいかに聞き取るか
◇打保由佳:ある地域の障害者運動家のライフヒストリーが提起する障害者差別の諸相

受け入れ論文、図書、報告書

2022 年 1 月 1 日～4 月 10 日(下線は会員)

論文、報告書、著書などをお送りください

・好井裕明, 2022『「感動ポルノ」と向き合う――障害者像にひそむ差別と排除』岩波書店.
・片桐雅隆, 2022『人間・AI・動物――ポストヒューマンの社会学』丸善出版.
・杉野衣代, 2022『居住支援の現場から――母子世帯向けシェアハウスとハウジングファースト』晃洋書房.
・奥村隆, 2022『慈悲のポリティクス――モーツァルトのオペラにおいて、誰が誰を赦すのか』岩波書店.
・熊谷苑子, 2021『有賀喜左衛門――社会関係における日本的性格』東信堂.
・南誠(梁雪江), 2022「〈当事者〉研究をする〈私〉のオートエスノグラフィ」川上郁雄・他(編)『移動とことば』くろしお出版.
・鳥越浩之・足立重和・谷村要(編)『コロナ時代の仕事・家族・コミュニティ――兵庫県民の声からみるウィズ/ポストコロナ社会の展望』ミネルヴァ書房.
・佐々木研究室編集, 2022『2021 年度地域連携センタープロジェクト 灯籠文化圏比較研究』同研究室.
・齋藤雅哉, 2022「障害児との生活を形づくる母親たちの生活実践としてのケア」『保健医療社会学論集』32-2.
・齋藤雅哉, 2022「個人、生活戦略、共同性」『哲学論集』68, 大谷大学哲学会.
・長廣利崇・西倉実季(編), 2022『オーラルヒストリー資料集1――和歌山大学の全共闘運動の語り』和歌山大学紀州経済史文化史研究所.

『語りの地平 Vol.7』原稿募集!!

○投稿エントリーを受け付けています。論文タイトル(仮題でよい)、投稿ジャンル(論文、研究ノート、書評、特集、調査報告など)などを明記し、ホームページのエントリー窓口から申し込んでください(エントリー締め切りは 4 月末日です)。投稿 原稿(特集以外)の締め切りは 6 月末日です。
○論文、研究ノートについては査読があります。
○特集は「トランスクリプトの作成、利用をめぐる経験(仮題)」に関するエッセイです。インタビュー後のトランスクリプト(文字おこし記録データ)をめぐるいろいろな経験をご紹介ください。締め切りは 7 月末日です。
○刊行は 11 月(予定)です。

投稿規定

(社)日本ライフストーリー研究所編集委員会決定

2015 年 12 月 5 日

改正 2020 年 4 月 3 日

1. 本誌は(社)日本ライフストーリー研究所(JLSR)の機関誌であり、原則として年 1 回発行する。編集委員会の構成は、JLSR の代表理事が編集委員長を務め、運営委員が編集委員を兼務する。

2.本誌は、ライフストーリー、オーラルヒストリー、ライフヒストリーの研究に寄与する論文、研究ノート、研究動向、フィールドワークの報告、関連文献の書評、JLSR 所蔵資料の紹介およびリストなどを掲載する。

3.投稿資格は原則として前年度会費を支払った会員に限られるが、編集委員会が適当と認めた場合はその限りではない。

4.論文、研究ノートにおいては同一ジャンルでの連続投稿はできない(研究ノート→論文は可)。

5.投稿原稿は、未発表のものでなければならない。他の雑誌との二重投稿は認めない。

6. 投稿原稿のうち論文(原著論文)および研究ノートは、原則、査読審査のうえで編集委員会が採否を決定する。その間に、投稿原稿は審査委員会から原稿の加除修正を求められることがある。

7. 編集委員会が会員に寄稿を依頼することがある。

8. 投稿する会員は、編集委員会に原稿のワードファイルのデータを電子メールで送付し、編集委員会の通知にしたがい提出する。

9.本誌掲載原稿の著作権は、原則として本研究所に帰属する。但し、掲載誌刊行 1 年を経たあと、著者が著作権の返還を申し出たとき、その申請を正当と認めた場合には返却する。なお、その場合でも、本研究所の運営に必要な事項(本研究所ウェブサイト等での掲載、掲載誌の販売等)については著者の許諾なしで継続実施できるものとする。

10.掲載原稿の著者は、掲載された論文等を機関リポジトリや自分のウェブサイトで公開することができる。ただし、掲載誌刊行後 1 年間は公開できないものとする。

11.論文、研究ノートの掲載者には掲載誌を 2 部贈呈する。

執筆要項

1.原稿の長さ

原稿字数は以下を標準とする(長くなる場合は、要相談)。

- ・論文:20,000 字
- ・研究ノート:8,000～12,000 字
- ・フィールドワーク報告:3,200～12,000 字
- ・特集(エッセイ):4,000 字
- ・書評:2,000～3,200 字
- ・他のジャンル(例、資料など)は編集委員会にエントリー時に申し出ること。

2.要約とキーワード

論文には、500～800 字程度の要約をつけ、要約の末尾に、3～5 語のキーワードを明記する。なお、論文については、著者の希望によって末尾に英文要約＋キーワードをつけることができる。

3.書式

論文は、表題・執筆者氏名・和文要約・キーワード・本文・注・引用(参考)文献・図表・(ひらがな氏名 所属)の順で構成する。

4.表記法

英数字は、原則として半角文字。本文中の「。」「、」「『』」、「()」「〈〉」などの記号は全角文字。

節、項には半角数字。「1. 」「1.1.」、項以下は、(1)(2)・・・などを用いる。

年号は、原則として西暦を用いる。年号標記の時は「2015(平成 27)年」と記す。

5.文献引用と注

引用文献は、本文中の引用、参照個所の最後に(桜井 2002:15)のように、「(著者名 発行年:引用頁)」となる。

注は、本文該当箇所の語句のあとに(右肩ではなく)、1)、2)のように片括弧の半角で記し、本文の最後にまとめて記載する。

末尾の文献リストはアルファベット順で記載する。

和文文献の句読点は全角の「, 」「. 」を用いる。和文文献は、著者名、出版年、書名、出版社名の順に表記する。翻訳文献は、著者名をカタカナ名として、あとは和文文献に準じる。なお、原書を記したいときは翻訳文献を記載したあとに( )内に欧文文献に準じて記載する。

欧文文献は、句読点をはじめ著者名などすべて半角で表記する。書名、雑誌名はイタリック体とする。

2022 年度総会のお知らせ

2022 年 6 月 5 日(日)

13:00～15:00

リアルとオンラインで参加可能の予定です。欠席の場合は委任状(メール連絡で可能)をお出しください。

(社) 日本ライフストーリー研究所

〒408-0032 山梨県北杜市長坂町大井ケ森 1176-489

E-mail: info@lifestory.or.jp HP: http://lifestory.or.jp